

共に生きるために

講演	大津 健一【おおつ・けんいち】
講師紹介	学校法人アジア学院 アジア農村指導者養成専門学校校長

世界の問題を私たちの問題として考える力

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました学校法人アジア学院アジア農村指導者養成専門学校の校長をしています大津と言います。Asian Rural Institute (A R I) という名称で、国際的に知られている学校の一つだと思っています。こうして同志社スピリット・ウィークでお話をする機会を与えられたこと、この場所を提供くださったことを、まず感謝を申しあげたいと思います。はるか年齢の離れた若い皆さんにお話をできることを光栄に思っています。

2001年9月11日、ニューヨーク、ワシントンでテロ攻撃があり、世界中に大きな衝撃を与えたことは、皆さんご存じだと思います。そのときに、米国のドネラ・メドウスという環境学者が書いた『世界がもし1000人の村だったら』というエッセイが、インターネットで世界中を駆けめぐりまして、それが訳されたものが日本の私たちにもメールで届けられ、当時話題になりました。それがきっかけで、再話という形で池田香代子さんが『世界がもし100人の村だったら』（マガジンハウス 2011年）という絵本のようなスタイルの本として出版され、ベストセラーになったことをご存じかもしれません。『世界がもし100人の村だったら 2』（マガジンハウス 2012年）にはドネラ・メドウスのエッセイが載っておりますので、機会があったらご覧いただけたらと思います。世界に起こっていることを一つの地球村の問題として、「もし100人の村だったら、どういう現状があるのか」という話にしたことにより、今、世界で起こっている事柄を私たちの問題として考えるきっかけとなりました。当時、よく言われた言葉に「Think Globally, Act Locally」というのがあります。私がこの言葉に出会ったのは1987年、カンボジアに行き、アメリカの教会関係のNGOのオフィスを訪ねた時、正面にこの言葉が掲げられていたのを見て、大切な言葉だと思いました。それが後に日本でもいろいろな場面で語られるようになりまして、今日の時代、グローバルな視野で私たちの問題を考えながら、私たちの立っている場で行動することが大切な時代になってきているように思います。

「いやそうではない。僕はThink Globally, Act Locallyだけでは不十分なのだ。Think Locally, Act Globallyという面も必要だ」と言う人もいますが、今日の問題をローカルな視点で考えながら、世界の人たちと一緒にグローバルに考えていくことは大切なことだと問われているのではないかと考えています。私自身の小さな経験のなかで、今日の世界に起こっていることを私たちの問題として考えていく力が、今、私たちに必要ではないかと思っています。

アジア・アフリカの農村指導者と共に

皆さんにお話をさせていただく前に自分がどこにいるか。この場所に、なぜ今立っているかということをお話させていただきたいと思います。現在私はアジア学院におります。アジア学院は栃木県那須塩原市にあります。西那須野にある小さな学校に毎年、アジア・アフリカ・太平洋諸島・ラテンアメリカ・カリブ海等の開発途上国から学生が来ます。約30名の人を招いて9カ月間、農村指導者としてのトレーニングを行い、また農村の現場に帰っていただく働きを続けております。もう一つは、この那須塩原市は福島原発から110kmの距離にありまして、水素爆発が起った時、風の流れによって南側の那須・那須塩原市・大田原市・日光市まで放射能が風によって、そしてその時の雨によって私たちのところに降り注ぎました。それで私たちの学校は、放射能による土壤汚染の問題を抱えております。3月11日、東日本大震災のときは震度6弱でした。校舎が横に揺れ、地上に立っていることができませんでした。校舎も被害を受けましたが、同時に放射能被害も受けて、今は除染の作業をして放射能汚染に向き合っています。これは私たちが直面している今の問題ですが、通常は4月から12月まで9カ月間、草の根で働く農村指導者を招いて研修プログラムを実施しています。アジア、アフリカとのかかわり方はいろいろあると思います。大学レベルで研究者を招いたりということもありますが、私たちは草の根で働く農村指導者を招いてアジア学院で学んでいた。そして再び草の根の現場に帰っていただく。そういう働きを続けて今年で38年目に入っております。1973年にこの働きが始まりましたので2013年に創立40周年を迎えます。私たちの学校では毎年アジア・アフリカ等から30名くらいの人たちが来て学びます。日本人の学生も数名いて、彼らのなかには将来、青年海外協力隊で働きたい、アジア、アフリカにかかわりたいという人たちが学び、そういう人たちも含めた30名前後の学生で研修を行っています。現在、卒業生は1150名、40年近くやって少人数ですが、世界55カ国に私たちの卒業生がいることになります。

田植えを行った後、皆で撮った写真です。いろいろな国の人たちが食堂と一緒に食事をし、皆で田植えをし、自給の体制をとっています。アジア、アフリカの人たちは貧困のなかにあつて食べるものがない。食べ物をつくる自給体制を整えていく。化学肥料や農業を使わず、その土地にあるものを利用する。牛糞、馬糞、豚の糞を利用して糞などを混ぜながら肥料を作り、土地を豊かにして自給自足の農業を心掛けています。学校では90%くらいの食糧を自分たちで生産しています。米・小麦・野菜・鶏・鶏卵・豚肉、牛については飼料が汚染され、外部より買わねばならないので、現在飼育は中断しております。豚を飼い、自家消費以外の肉は地域の人たちに買ってもらう。今年は米を9月末に収穫しまして、収穫した農作物はすべて第三者機関に放射能検査に出しております。（2012年1月よりアジア学院で計測）。アジア学院では、ベラルーシの子どもへの食品基準を採用し、基準値以下であれば食べることにしています。玄米は11ベクレル、白米は3ベクレルで、基準値を下回っていました。今年収穫した米は、来年来る学生たちが食べる形をとっています。米のなかに放射能の含有量が少なかったことは私たちにとても幸いでした。私たちの願いは、安全な食べ物を生産し、平等に分かち合って食べれる形を作っていきたいということです。

違うことはすばらしい

アジア学院ではアジア、アフリカ等の国からも来ておりますが、いろいろな国の人たちがいるということは、それぞれ違うということを意味しています。正義と公正に立った社会の構築を目指したいと願っています。文化・言語・民族・宗教が違う人たちが共に集まって生活しているわけですが、互いの違いを尊重することを基本として、自給自足を基盤にしたコミュニティづくりを目指して生活していく、そのことが、共に生きるために大切なことではないか。いろいろな人たちが共同生活をして歩いていくこと、世界の人たちが集まって一緒に生きようとするとき、どういうことが起こるかということを経験する一つの実験場だと考えています。「世界がもし100人の村であつたら」というのが今日の問題を考えていこうとする手掛かりを与えるとすれば、アジア学院のコミュニティそのものも、世界の人たちが集まると、どういうことが起こるかを考える一つのきっかけになるのではないかと考えています。

毎年、収穫感謝の日には学生にテーマを決めてもらってその日を守っています。今年10月8、9日に収穫感謝の日を行いました。そのなかで学生たちが出したデザインとテーマがあります。“Coloring the World with Love care Harmony in Difference”「愛と思いやりと調和で色とりどりの地球に」。これには、大切な言葉が散りばめられているのではないかと思います。in Differenceというのは大切なことなのです。これから皆さんはいろいろなところで働き、いろいろな人に出会うことになると思いますが、違うことが大切なことで、違いをどこまで認めあって、尊重しあっていくのか。違いを認めあいながら、共通の場所を見いだす努力が今日、私たちが課せられている課題ではないでしょうか。はじめてから共通の場に立って一緒にやるのではなく、違いははじめにあって、違う人びとと、どう一緒に行動していくか。キリスト教・イスラム教・ヒンドゥー教・仏教、いろいろな宗教があります。宗教的に違う信仰を持っている人びとと一緒にどうやって生きていくかを考える一つのきっかけを与える言葉が、このなかに表れている。Coloring the World色とりどりの世界を創ることににおける豊かさ、違うことによって、より否定的な面が増えていくのではなく、違うことによって豊かさがある世界を、私たちはこれからのあり方をイメージしていく必要があると、働きのなかで学んでいます。

私の同志社時代

せっかくの機会ですので、私の同志社時代はどのようであったかをお話させていただきたいと思います。私は1962年度生です。皆さんからすれば、はるか昔の時代に同志社に入りました。1960年に日米安保条約の締結に反対する闘争、安保闘争が起こりました。安保闘争が終わって、その後、大学では安保闘争への敗北感が漂っていた時代でした。学生一人ひとりが、安保反対を闘いながら安保条約を阻止することができなかったという深い傷を負いながら、大学生活があったように思います。一方では、敗北感をもっている、ある面で学生運動の高揚の時代でもありました。同志社大学もそうかもしれませんが、今は、どこの大学のキャンパスでも学生運動の声は聞こえませんが、活発ではありません。当時は今出川キャンパスを出て、今出川通りから河原町通りを南下するのがデモのコースでした。同志社からまずデモ隊が出て府立大学の学生、立命館大学の学生、京都大学の学生が合流するわけですが、デモが出ると3000人くらいの学生が集まって河原町を目指してデモ行進をしました。毎週、学生のデモがあれば3000から4000人が集まる。最後は円山公園で解散する。ある意味、学生の社会・政治意識が高い時代であったかもしれません。学生の社会問題に対する関心、政治意識が高いときに私は大学に入り、1年生で学生運動の洗礼を受けたといえるかもしれません。キリスト教の洗礼を受けて神学部に入ったわけですが、学生運動の洗礼も受け、チャレンジを受けた時代でした。私は1年の時、先輩と東京で行われた全学連大会に行ったり、佐世保にアメリカの原子力潜水艦が入港するからということで佐世保まで行ったりした覚えがあります。デモに参加することがあたりまえで、行かなければ上級生から「なぜ行かないのか」と問い掛けを受けた時代でした。そういう面においては、学生運動は私に、平和とか正義の問題とか社会的なことに対する関心の目を向けさせるきっかけを与えてくれたと思います。あの時代は、大学の授業料値上げの問題があれば授業料値上げ反対とか、なかには研究室から垂れ幕を下げて「授業料値上げ反対」といわれる教師もおられたりした時代でした。

筑豊との出会い

もう一つ、1960年代における大きな流れは日本の経済成長という問題です。経済成長を支えるものとして日本政府の政策としては石炭から石油へのエネルギーの急激な転換が行われました。今、原発がエネルギー問題の要のように言われていますが、私は石炭から石油へと切り換えられる時代のなかにおりました。そのことによって当時、九州とか北海道に多くの炭鉱がありましたが、急激に炭鉱が閉山に追い込まれ、多くの失業者が生み出された時代でした。一瞬のうちに生活のすべてを奪い取られ、その日の生活にも困る、多くの人がどん底の生活を強いられ、多くの失業者が出て、なかでも大きな被害を受けたのは子どもたちでした。当時、土門拳の『筑豊の子どもたち』（パトリア書店 1960年）という写真集が出版さ

れまして、日本の社会に大きな影響を与えました。写真集がベストセラーになることは、あまり考えられなかった時代に、彼の写真集を通して世界の人びとが日本の現状をみるという現象が起こりました。当時、急激なエネルギー転換によって炭鉱が閉山になり、失業した人々を救おうという運動が起こりました。通常、共同募金は「赤い羽根運動」ですが、石炭の色＝黒ということで、羽根の色を置かえた「黒い羽根運動」が全国的に起こり、各地で募金活動が行われました。このとき、全国のキリスト教系の大学も共鳴しまして、「筑豊の子どもを守る会」を作り、行動しようということになりました。東京の国際基督教大学（ICU）・東京神学大学・青山学院大学・立教大学、関西では、同志社大学・関西学院大学などが参加しました。夏になりますと参加したメンバーは、福岡の筑豊地域の閉山炭鉱に分かれて入り、子ども会の活動や、学習活動を行いました。私は、神学部学生を中心とした「筑豊の子どもを守る会」のサークルに大きな影響を受けました。もし「お前の生きる原点は何か」と問われたら、「筑豊の人たちと出会ったこと、どん底のなかで、その日の生活がやっとできるような現実にいる失業した多くの人たちに会ったことが、自分の生き方の原点だ」と答えます。働きたくても働く場所がない人々、生活のどん底で呻いている人たちの姿に出会ったことは絶対、忘れてはならない、これからの人生のなかでも忘れてはならないと、そのときに思いました。私は、当時大学で勉強することはあたりまえだと思っていましたが、あたりまえでない人びとの方が圧倒的に多く日本社会に存在している現実、勉強することは何かということを基本的に問いかけられたのです。その時以来、このことを考えながら、私が同志社で勉強できるのは、勉強できない人に代わって自分が勉強をさせていたでいるという考え方に変わりました。格好の良い、傲慢な言葉に聞こえますが、彼らのことを無視して、何もなかったように学校で勉強することを良しとする思いにはなれず、その人たちの問題を担いながら、この学校で勉強していこうと思ったのです。

キリスト教は人々を生かす力になるのか

この延長線上で、もう一つ疑問に思っていたことがあります。私の学年では、神学部に入学したのは25名でしたが、神学部の学生の多くは将来、牧師を志していたと思います。私は、自分の信じるキリスト教がはたして、目の前の「筑豊の子どもを守る会」という同志社のサークルで出会った筑豊の現実はどう向き合っていくのかという葛藤のなかにいました。信じているキリスト教がその現実に応えられなかったり、それに目を背けさせるならば、この宗教から離れたかったと思います。そして、4年生に進級する前に1年休学して、筑豊の閉山炭鉱に住み込むことにしました。元炭鉱長屋に住み込んで、自分なりに考えてみました。最近、小林多喜二の『蟹工船』や太宰治の『斜陽』など、かつて私が学生時代に読んだ本を、格差社会をどのように生きていくのか不安を抱える今日の若い人たちが、読むようになってきたということが報道され、話題になりました。当時、過酷な労働のなかで、虐げられた生活をしている人の姿を見ていた私も、どのように生きていったらよいのか考えながら、河上肇の『貧乏物語』などを読みました。「序」に、このような言葉があります。「人はパンのみにて生くるにあらず、されどまたパンなくして生くるものにあらず」。彼は、パンなくして生きられないと強調しています。これは私にとっても大きな問題でした。新約聖書のマタイによる福音書4章4節では、イエスが悪魔に誘惑された物語があります。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」というイエスの言葉があります。食べるものにも困り、苦しみの中にいる人びとが現実に目の前にいるのに、人はパンなくして生きていけるのか。それが大きな問いでありました。この問題は自分の課題として、本当にそうなのか、人が生きるということはどういうことなのかを自分のテーマとして考えていたのです。

閉山炭鉱に住んで

妻も梅花女子大学の「筑豊の子どもを守る会」に入っていました。彼女は違う大学でしたが、私の大学院1年のとき学生結婚して、その後の歩みを2人で進めていきました。神学部の大学院を卒業して通常最初の任地は教会に遣わされるのですが、僕はもう一回、原点だと思ふ筑豊で、苦しんでいる人々と生活を共にしようと思い、妻と子どもと共に筑豊に行きました。閉山炭鉱の人々には、何か理由があって駆け落ちをしてきたと思われました。一切、社会的な活動をしないという約束のもと、仕事を紹介してもらい筑豊に住みました。今でも思い出しますが、所帯道具を運送屋さんに頼んでトラックに積んで、高槻から筑豊の閉山炭鉱に行ったとき、ただで住んでもよいと家をいただいたのですが、運転手さんが「ここは人が住めるところではない。荷物は降ろせない。時間をあげるから別の家を探せ、それまで待っているから」と言われて「降ろして欲しい」「降ろさない」と運転手さんと議論をしたことがあります。

もう一度、あの時と同じ思いをもって同じようなことができるかどうか自信はありませんが、ここで生活するのだとその時は燃えていました。その後、父の問題で「帰ってこい」と言われてそこから引き揚げましたが、私は今でも、筑豊から引き揚げてきたことを負い目に感じております。「大津は筑豊におるべきではないか」と言われたときには、心がズキズキと痛むような思いをしました。言い訳がもしれませんが、自分が信念をもってやろうとしたことを、いろいろな事情が出てきて変更せざるを得ない、貫徹できなかったことに心のどこかで疼きを持っていることを申し上げておきたいと思います。

「共に生きること」を人生のテーマに

今日は「共に生きるために」というテーマを掲げさせていただきました。私の人生のなかで、自分にテーマがあるとしたら「共に生きるために」ということを人生のテーマにできたと言えると思います。どういう形で、世界の人びとと共に生きることができるか。我々のアジアの友人たちと、どう共に生きることができるのか。神学部を卒業してから今日まで自分にとって変わらないテーマであり、大学時代に考え、葛藤し、どうしていったらいいのかわからなくて迷いながらも、「人びとと共に生きること」を大切にしてきたし、これからも、大切にしていきたいと思っています。

私がおりますアジア学院は、「That We May Live Together」「共に生きるために」を学校のモットーとしています。自分がテーマにできたことが学校のモットーになっていることは、偶然のめぐりあわせですが、自分が在るべきところに在るという思いをもって、この仕事を続けております。

そして私は、「虐げられている人びと、苦しみの中にいる人びとの場に身をおいでいきたい」と願ってきました。上から下を見下ろすような、人間になるのではない。歳をいさますと役職が与えられます。ポジションが与えられたり、施設や組織の責任者になったりします。そういう形ではなく、底辺からものごとをみたり、とらえたり、考えたりする在りかたが大切ではないかと思っています。「他者感覚」という言葉があることをご存じかと思います。他者の立場に立つてものごとを考える力、そうすることで、自分をもう一回見直す力のことです。日本は、1960、70年代、ずっと高度経済成長を続けてきました。それが1980年代頃から、日本人の考え方が、良い意味での個人主義ではなく、ミーイズム、私中心的な考え方になってきて、同時に「他者感覚」でものごとを考える力を無くしてきたように思われます。今日の日本社会の内向き思考は、80年代後半、バブル経済が弾け、リーマンショック、東日本大震災でカウンターパンチをくらって、さらに強くなってきています。私たちはそういう流れのなかで、「他者感覚」を無くしている。「他者感覚」というのは、わかりやすい言葉では思いやり、キリスト教的な言葉では隣人愛にあたると思います。無くしてはいけないものを無くしつつあるという現実を、一人ひとり生き方とともに、振り返る努力が必要だと思ひます。上から下を見下ろすトップダウンではなく、苦しみの中にいる人びとの立場になって、その問題を考えていく、そのセンス、相手のことを思いやりたり、考えたりする力を、もし無くしてしまったら、今後とてもきこえない、ガツガツした冷たい社会が形成されていくと思います。共に生きる社会は、そうではなく、もっと互いに他者に関心を払い支え合う社会を目指していくことだと思いますし、そういう在りかたが大切ではないかと思ひます。

アジアとの出会い

私とアジアとの出会いについてお話をさせていただきます。アジア学院という学校にいるからアジアのことにかかわっているということではなく、私はずっとアジアのことに関心をもって歩んできました。大学時代、神学部で竹中正夫先生と、深田未来生先生のお二人の恩師がいました。このお二人から比叡山ホテルでアジアキリスト教協議会都市農村宣教委員会 [Christian Conference of Asia (CCA)、Urban Rural Mission] の集りがあって、その委員会の集まりを手伝うように、というお誘いを受けました。僕の人生にとって、そのお誘いを受けたことが、実はアジアの問題とかかわる第一歩でした。そういうチャンスを与えていただいたことを感謝しております。私はその後、1986年から94年の8年にかけて、シンガポールに本部があったアジアキリスト教協議会で働きました。開発奉仕委員会の担当幹事としてアジアの教会、アジアの人びとと働きました。またアジアの同僚たちと働き、そこで議論し、同じキリスト教でも、いろいろな国から来たいろいろな考え方の人たちと一緒にやっていたことが、どれだけ難しいかをそのなかで学んだわけでした。そして、私がうれしかったのは、アジアキリスト教協議会で働くことが決まったとき、学生時代に恩師から声を掛けられてアジアキリスト教協議会の集りを手伝うようにと言われたときの会議の主催者、インドのハリー・ダニエルさん、アジアのキリスト教の世界ではよく知られた方ですが、彼からCongratulationという祝電をいただいて、僕のことを覚えていてくださったことに大変驚き、感謝しました。あの時の働きを見てくださっている方がいたということは想像つかなかったのですが、そういうつながりや関係がとても大切だと思うわけです。アジアキリスト教協議会の仕事の前に、アメリカで2年間勉強しました。自慢じゃありませんが、英語はうまくならない、語学能力のなさをつくづく感じておりましたが、アジアキリスト教協議会では英語で生活をし、8年間働きました。

東アジアの人々と共に

皆さん方に申し上げたいことがあります。この時代は英語が大切です。アメリカ英語や、イギリス英語だけではなく、アジアやアフリカの人々とコミュニケーションをとるためにも英語が大切な時代になっています。それを疎かにしてほしくない、勉強できるときに勉強をしておいて。私は同志社で勉強しているときは、英語の成績がよくありませんでした。英語なんかそんなものな将来使わないとか、そんな世界で生きないとかいって、タラをくくってきただけで、そこで生きざるをえないことになり、もう一度やり直しました。勉強する機会があるときに、しっかりと学んでほしいなと思ひます。それは世界の人たちと、ただ英語で会話するということではなく、コミュニケーションをとる、お互いに理解するために共通の言語が必要であるからで、私は、そのことを心から願っております。

キムヨンボク
韓国の生命学研究院アジア太平洋生命学大学院院長の金 容 福先生は、キリスト教の世界では貴重な発言をされる学者ですが、あるときに金先生から、学生を日本で学ばせたいのだが、どこか良い大学はないかと尋ねられました。先生は、英語、日本語、中国語ができる学生を育てたい、これからの学生は東アジアの中では少なくとも英語のほかにあと2カ国語を学ぶことが大切だと言われました。そういう見通しをもった先生があられることに励ましを受けました。

東アジア共同体という考え方が打ち出されています。日本人がはなかなか出てこない発想です。東アジア共同体は、この地域が互いに理解し、協力しあうために大切なネットワークとして必要であると東京大学の姜尚中先生も言われています。ヨーロッパは、EUで、横のつながりができていますが、アジア地域ではそれが難しいのです。韓国、中国との間には歴史認識の問題、過去の歴史のいさかり、教科書問題や領土の問題も抱えています。しかし、互いに共通の場をもつためには、それを担う人材育成が必要だと思ひます。私たちは、そういう試みをしていく努力が必要だと思ひます。最もり少し上の世代の韓国人とは日本語でコミュニケーションをとることができて、反日的立場に立つ人たちがいる中で、日本を理解し、日本と韓国をつなぐこととする人たちがいて、そういう人々を通してコミュニケーションを取るということができたが、今日、韓国でも日本語を理解する人たちが少なくなり、また日本人にも韓国語ができる人が少ない現実のなかで、韓国と日本をつなぐ人、東アジア共同体を担う人材が、ぜひ同志社大学からも出てほしいと思ひます。

戦争責任への誠実な対応を

アジアにかかわるなかで痛感したことは、戦争責任の問題です。私たちは近代史を勉強していないこともあり、過去の歴史を正しく認識していない。韓国人たちと話をしますと、「今の日本の青年はおおらかでいいよ。しかし過去の歴史に対する認識が弱い」と指摘されます。韓国の学生たちと比較すると一目瞭然で、韓国では近代史で日本の植民地支配の歴史を学んでいるのに、私たちの方ではそういうものが抜け落ちてしまっていることを感じます。

アジアキリスト教協議会幹事のときには、アジアの障がい者の問題にも取り組みました。あるとき、マレーシアのクアラルンプールに行って、障がい者グループの人たちに出会って、アジアの障がい者の会議を開く準備会合のあと、そのグループのリーダー格である障がい者の青年が「僕の家に来ないか」と誘ってくれました。せっかくの機会なので、皆で彼の家に行かせていただきました。彼は、親戚のおばさんと一緒に住んでいました。家について、彼は僕をおばさんに「アジアの障がい者の問題を準備するために大津が日本から来ている」と紹介してくれました。おばさんは、「よく来てくれました。甥がお世話になって感謝します」と丁寧に挨拶くださいました。しかし、その直後、顔を上げて僕の顔を見た途端、顔面が蒼白になり、突然怒っておられることがわかりました。「あなたは日本人ですか」「私は日本人です」「日本人が私の家の庭にいることは許せない。ここからすぐに出ていってほしい」と言われたのです。私は血の気が引くのを感じました。突然、唐突な形で言われたものですから、とつてもびっくりして何が起ったのかわかりませんでした。私はしどろもどろの英語で「どうしてですか」と聞き返すと、「私は子どもの頃、日本兵が私の村に来て村の人たちを集めて、日本刀で斬りつけ、一人ひとり男の人の首を切り落としていったのを思い出します」と言われたのです。「竹串に切り落とした首を刺して並べていた光景を思い出します」と。彼女にとっては子ども時代のトラウマが、日本人である私に出会うことで、突然走馬灯のように蘇ってきて、私に「この家から出ていって欲しい」と言われた。後で説明を聞いてわかりました。私は個人でも、教会のなかでも、日本の侵略戦争における残虐行為を聞き、戦争責任の問題を問うてきた人間だし、頭のなかではわかっていたつもりでしたが、日本のアジアへの侵略戦争がどういふふうアジアの人たちの心を傷つけているか、その時に改めて知らされたわけです。

実はその前日、ベナンを訪ねました。同志社大学文学部を卒業した知人が、ベナンの工場の責任者をしており、彼が夕食に招待してくれました。そこに彼の知人の中国系の老夫婦も話が弾むようにと招いてくれました。海岸通りのレストランで海鮮料理を食べ、食事が終わったとき、唐突に、学校の教師をしていたという奥さんの方から「子どもの頃を思い出します」と、クアラルンプールで言われたこととほとんど同じことを話されました。静かな口調で「日本兵が村に来て、首を斬って竹串で並べた光景を思い出します」とボツリと言われました。それまで楽しい会話をしていましたが、私も知人も、返す言葉がなくて、ただ黙ってそれを聞いていました。偶然、私は2日続けて同じストーリーを聞くことになりました。全然違う場所で全然違う人から聞いたことですが、その問題がどれだけ深刻であったか、私たちにとって戦争責任という問題は、軽いものではない、私たちは直接手をくだしたり、かかわっていないかもしれませんが、日本人として、その責任を私たちは負い続けていく、その責任があることを、私とアジアとのかわり方で、ぜひ申しあげておきたいと思います。アジアとの関係を考えるうえで、過去の歴史をしっかりと熟視し、相手国や人との信頼関係を構築することが、今でも私たちに課せられた課題です。私たちは、戦争責任を負うことに誠実に向き合ってこなかったように思います。戦後、そのことがずっと続いている。続いているからこそ日韓で何か問題が起こればギクシャクするし、日中で何か起こればギクシャクする。信頼関係がないから、繰り返し問題が起ってくる。戦後ドイツでは、ナチス・ドイツがヨーロッパ各地においてなした数々の侵略・迫害の戦争責任を背負い、それを克服する努力をしてきました。それに対して日本はそんなことを怠ってきたという思いがするわけです。そういう面では私たちがアジア、アフリカ、世界の人びととの関係を考えるうえで、私たちの過去の歴史を、きちんと直視する姿勢が必要であり、そのことなしでは、正しい関係を構築することができないのと思うわけです。グローバル化した時代の私たちの責任とか、国際化社会の中の日本といっても始まらない、根本を抑えておかないと始まらない問題ではないかと思えます。

1985年5月、ドイツ降伏40周年の連邦議会での、ヴァイツゼッカードイツ連邦大統領の演説で、「過去に眼を閉ざす者は、未来に対してもやはり目を閉ざすことになる」と言った、その言葉が世界的に大きな反響を呼び起こしたことを思い出します。私たち日本人は、過去の歴史に対して目を閉ざしている。マイナスの歴史ですが、それを直視したうえで、新しい日韓の関係、日中の関係、そしてアジアの国々との関係を構築していく、そのことをぜひ考えてほしい。そういうことを欠落した形でつきあっていくなら、本当の信頼関係を築くことはできないと思います。未だに日本軍「慰安婦」問題、教科書問題、靖国神社問題などが山積みになっています。日本キリスト教協議会総幹事時代（1994～2003）、日本のキリスト教界の代表の一人としてこの問題に取り組みましたが、未だにその問題が続いている。また元「慰安婦」の人たちからも問いかけを受け続けております。教科書問題で歴史の歪曲の記述があったり、首相や閣僚の靖国神社参拝問題が起これば、すぐに近隣諸国から反発が出てくる。過去の歴史に対して、正しい認識をもって見ていく、あたりまえのことだと思いますが、過去の歴史の歪曲発言を繰返す日本政府の閣僚に対して、近隣諸国は、そういう日本のあり方は何だということでは反発が強まってくるのだと思うわけです。

良心に恥じない生き方を

アジアキリスト教協議会で働いたあと、現在アジア農村指導者養成専門学校で働いていることについて、この働きは自分にとっての戦争責任を担う一つのあり方だと考えています。アジア農村指導者養成専門学校の働きも、基本的にはアジアに対する戦争責任の自覚から、始められました。2003年、日本キリスト教協議会総幹事を辞める退任パーティを東京でしてもらいました。その時、土井たか子先生に来てもらいました。当時土井たか子先生は元衆議院議長をされ、社民党の党首でした。大学時代、先生から日本国憲法を学びました。土井先生は、私が同志社の卒業生ということもあって、忙しいなかをわざわざ来てくださいました。そのとき、私への、はなむけの言葉として「大津さんは、良心の全身に充満したる丈夫だ」ということを言うてくださいました。僕はそれにふさわしいものではないと思いますが、そのように言うてくださったことは、同志社の卒業生として、とてもうれしいことです。「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ」というのは新島襄が同志社教育で願ったことです。そういう若い世代の人たちのことを願って彼は同志社をつくったと思います。が、この国が必要なのは、そういう良心をもった人が生まれてくることだと思っています。

私は友人たちと東京で富坂キリスト教センターの支援を受けて「思想・良心・信教の自由研究会」を数年間、続けました。そこで本を3冊出しました。執筆者の岡本厚さんは、雑誌『世界』編集長、西原博先生は早稲田の憲法学の先生、朴さんは韓国のハンナラ党に属している有力な国会議員です。高橋哲哉先生は靖国神社問題にも積極的に発言している東京大学の先生です。池明観先生は韓日文化交流、韓流ブームの火付け人です。研究会では、一緒に勉強会をしたり、話し合いを続けてきました。

良心の自由ということは今日の時代、とても大切なことではないかと思えます。私は国旗・国歌法に関する地方公聴会には当時民主党国会議員であり、キリスト者であった竹村泰子さんの推薦で参考人として出席し、反対意見を述べました。民主党の議員から「国旗・国歌法に反対するのは何事か」と言われたことに驚いたことを思い出します。自らの良心に立つてこの時代を見、それを貫いていくことは私たちにとって大切なことではないかと思えます。

終わりに申しあげたいことは、今の私の心境です。この歳になっても、自分が足りないこと、知らないことが多くあり、その事実を知ることとは、大切であると思っています。私は、今まで勉強し、いろいろなことを経験してきた、時には隣国との関係に関わる問題の相談を受けたこともあります。今、私が思うことは、自分が足りないこと、十分でないこと、知識がないこと、一杯知らないことがたくさんあり、もっと勉強しておけばよかった、そのことを知らされています。聖書に「すると主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。」（コリントの信徒への手紙二 12章9節より）、これは使徒パウロの言葉です。パウロなしにキリスト教は世界へ広がって行かなかったと言われています。パウロはとても有能な人でしたが、身体的問題をもっていたと言われています。彼は自分の弱さを通して、神の力が働くと言いました。私は、自分に力があって何かをしてきたとは思いません。自分に能力がないのに追わされて、その場所で働いてきたという経験をしてきました。私、東京では働かないと思ってきた人間なのです。名古屋から向こうには行かないと思っていましたが、日本キリスト教協議会総幹事になるようにと言われて東京に行きまして、9年住んで、9年目に言われたことは、市民運動や平和運動にも関わってきたなかで「都知事選挙に出るように」との要請を複数の政党と、市民団体から言われました。石原さんに対抗する人が出てこなかったものですから「お前が出る」と言われて、僕は少し迷いましたが、友人たちから「絶対勝てないから勝てない選挙には出るな」と言われ、結局出ませんでした。そんなことも人生のなかで、計画して起こってくるのではなく、僕のような関西人が、都知事候補に推薦されるようなありえないことが、人生のなかでは起こります。自分がもっていた能力ではなく、人とのつながりを大切に、信頼関係を築いていく。妥協しないで、自分の思うあり方を通していく、そういうことで人生のなかでいろいろなことが起こってくるのではないかと思います。皆さんのこれからの生活のなかでも、ぜひ自分の良心を大切に、それに忠実に、誠実に生きてほしい。学生時代に思索したことは余り利害関係がありませんから、意外に大切なことを考えていると思うのです。それを大切に、これから歩いてほしいと思います。ありがとうございました。

2011年11月2日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
京田辺校地 「講演」記録